琉球大学学術リポジトリ

沖縄県座間味村に嫁いだ県外出身女性の生活環境評価

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮内, 久光, Miyauchi, Hisamitsu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2838

沖縄県座間味村に嫁いだ県外出身女性の生活環境評価

宮内久光

I　はじめに

（1）研究課題の設定と研究目的

筆者は前稿（宮内，1998）で，沖縄県座間味村に転入した県外出身者について，村での定着性を基準に，移動型県外出身者と定住型県外出身者に分類し[1]，それぞれの属性や居住地移動パターンなどを分析した。そして最後に，定住型県外出身者が村に転入した後に，村の生活環境，すなわち，日常生活や旧住民（座間味村出身者）との人間関係などに対する評価はどうであるのか，また，そのような評価が，転入後の時間の経過とともに，どのように変容していくのか，を今後の検討課題とした。そこで，本稿では前稿の問題提起を受けて，上記の課題を考察することを目的とする。

研究対象となる定住型県外出身者のうち，事例として，座間味村に嫁いだ女性，いわゆる「ヤマト嫁」を取り上げる。本研究でヤマト嫁を取り上げたのは，彼女たちは定住型県外出身者の中では，7割以上の人数を占める最大の等質グループであること[2]があげられる。さらに，大都市圏から島嶼への嫁入りそのものが，全国的にみても特異な現象であり，彼女たちの生活環境の評価と，その時間的変化を考察することは，ヤマト嫁がみられる島嶼のみならず，嫁不足が深刻化している多くの過疎地域にとっても，参考になると考えたからである。

ところで，関根（1993）によると，生活環境（living environment）とは，「居住者を主体とし，居住地を中心とした生活状態を表す概念」と定義される。生活環境の状態は，安全性，健康性，快適性，利便性の4つの側面から考察され，これら4つの側面が満たされて，初めて生活環境が整備されたことになる（p.27），という。

また，生活環境の現状を明らかにする方法としては，客観的な実態調査

によるものとともに，主観的・認知論的なアプローチの2つがある[3]（浜谷，1983）。前者は，統計資料をもとに，生活関連施設の有無や，そこへの近接性を指標として分析する。一方，後者は，居住者が生活環境をどのように知覚し評価したかの側面であり，重要度や満足度で測定される（関根，1993）。

そこで本稿では，関根による生活環境の概念を用い，その評価には主観的・認識論的アプローチから分析する立場をとる。各種施設の有無やそのレベルから，島嶼における生活環境を評価をする客観的な視点より，ヤマト嫁が生活環境をどのように評価しているのか，主観的・認識論的視点で考察したほうが，本稿の目的にかなうことは明白である。

以下，ヤマト嫁が座間味村に嫁入り後，村で生活をしてみたうえで，村の生活環境をどのように評価しているのか，そして，結婚生活年数がたつにつれて，それらの評価がどのように変容していくのか，を明らかにする。

（2）研究の方法

前節で述べた目的を解明するために，次のような方法を用いた。

座間味村に嫁いだ県外出身女性，いわゆるヤマト嫁は，1997年6月時点では39人を数える。このうち，村での定着性が高いと考えられる，夫が座間味村出身者，または夫が観光事業所経営者である31人に対して，アンケート調査を実施した。アンケートは1997年8月に訪問法で行い，27人から有効回答を得ることができた。

このアンケートは，彼女らの属性，結婚プロセスのほかに，日常生活や子供の教育環境，旧住民との人間関係に対する評価が質問項目として含まれている。ヤマト嫁の属性や結婚プロセスに関しては，既に宮内（1998）で論及している。そこで本稿では，日常生活や子供の教育環境，旧住民との人間関係の評価に関する項目を集計して，その結果を記述・分析することで，ヤマト嫁の村での生活環境の評価を考察する。

ところで，結婚生活年数の長短により，これらの評価に違いがみられるのだろうか。それを明らかにするため，ヤマト嫁を結婚生活年数を指標に

2つのグループに分類し，両グループ間に評価に違いがあるのかどうかを，統計学的検定を行って考察する方法をとった。ヤマト嫁を結婚生活年数で2つのグループに分ける基準として，本稿では1990年を採用する。すなわち，1980年代に座間味村に嫁いだグループと，1990年代に嫁いだグループに分類するのである。この基準の妥当性については，次章で述べる。

また，結婚生活年数の異なる2つのグループ間の差異を実証するための，統計学的検定として，分割表の独立性の検定を用いる。一般に，分割表の独立性の検定は，χ^2-検定が行われる。分割表の一般型を第1表に示す。

第1表　分割表の一般型

B ＼ A	A_1	A_2 …… A_j …… A_m	合　計
B_1	f_{11}	f_{12} …… f_{1j} …… f_{1m}	$\sum_{j=1}^{m} f_{1j} = f_{1.}$
B_2	f_{21}	f_{22} …… f_{2j} …… f_{2m}	$\sum_{j=1}^{m} f_{2j} = f_{2.}$
⋮	⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮
B_i	f_{i1}	f_{i2} …… f_{ij} …… f_{im}	$\sum_{j=1}^{m} f_{ij} = f_{i.}$
⋮	⋮	⋮ ⋮ ⋮	⋮
B_l	f_{l1}	f_{l2} …… f_{lj} …… f_{lm}	$\sum_{j=1}^{m} f_{lj} = f_{l.}$
合　計	$\sum_{i=1}^{l} f_{i1}$	$\sum_{i=1}^{l} f_{i2}$ …… $\sum_{i=1}^{l} f_{ij}$ …… $\sum_{i=1}^{l} f_{im}$	$\sum_{j=1}^{m}\sum_{i=1}^{l} f_{ij}$
	$\parallel$	$\parallel$ $\parallel$ $\parallel$	$\parallel$
	$f_{.1}$	$f_{.2}$ …… $f_{.j}$ …… $f_{.m}$	n

奥野（1977，p.84）より引用。

χ^2-検定の方法については，以下，奥野（1977，p.84）を引用しながら説明をする。これは，例えば，カテゴリーAがm個，カテゴリーBがl個ある$l \times m$の分割表の場合，まず，カテゴリーAとカテゴリーBとは互いに独立（無関係）である，という帰無仮説H_0をたてる。次に，自由度$\phi = (l-1)(m-1)$のχ^2-分布に従う，下記の統計量を算出する。

$$\chi^2 = \sum_{j=1}^{m}\sum_{i=1}^{l} \frac{(f_{ij} - f_{i.}f_{.j}/n)^2}{f_{i.}f_{.j}/n} \quad (4)$$

この式で算出されたχ^2値について，$\chi^2 > \chi^2\,\alpha(\phi)$ならば$H_0$を棄却，

$\chi^2 < \chi^2\ \alpha(\phi)$ならば H_0 を採用する。

しかし，セルの度数（fij）が極めて小さい場合（$fij < 5$）を含む分割表の独立性の検定では，上記の統計量を用いるべきではなく，Fisherの直接計算法を用いなければならない。

これは両カテゴリーが互いに独立であると仮定した場合の期待度数より，実際の度数が偏る確率 P を計算する。

$$P(f_{ij} \mid f_{i\cdot}, f_{\cdot j}) = \frac{f_{1\cdot}!\cdots f_{i\cdot}!\cdots f_{I\cdot}!\, f_{\cdot 1}!\, f_{\cdot 2}!\cdots f_{\cdot j}!\cdots f_{\cdot m}!}{n!\, f_{11} f_{12}!\cdots f_{ij}!\cdots f_{Im}!} \quad 5)$$

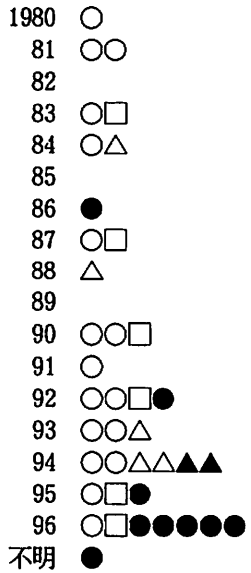
P 値が偏りの容認確率より大きい場合は，帰無仮説 H_0 は採用され，小さい場合は H_0 は棄却される。本稿で用いる分割表は，全て $fij < 5$ であるので，Fisherの直接計算法で P 値を求めた。P 値は少数第3位を四捨五入した。なお，容認確率は5％とおいた。

II　ヤマト嫁の属性と結婚プロセス

座間味村に初めて県外出身女性が嫁入りしたのは，1980年である。ヤマト嫁第1号である彼女は，東京都出身で，座間味村に来る以前は盲精神薄弱者施設の保母をしていた。1976年に友人と一緒に沖縄旅行の一環として初めて座間味村を訪れたのは，20歳の時であった。ビーチでスキンダイビングを行い，座間味の海の綺晴らしさに感動した。以来，年に2回のペースで村を訪れるようになった。1979年の夏には，好きな座間味で暮らすために，村内の旅館でヘルパーを経験している。翌年に地元出身の男性と結婚した。現在，彼女は夫と共にダイビングサービスを経営し，17歳から9歳までの4人の子供をもうけている。

以下，前稿（1998）で明らかになったヤマト嫁の属性と結婚プロセスを要約する。

県外出身女性が村に嫁いだ人数の年次変化と，夫の職業を表した第1図によると，ヤマト嫁の結婚数は，1980年代は毎年0～2人の間で推移して



白は夫が座間味村出身者　　黒は夫が県外出身者
○●は夫が観光産業従事者　　□■は夫が公務員
△▲は夫が上記以外の職業

第1図　ヤマト嫁の結婚年と夫の職業

聞き取りにより作成。
宮内（1998）を再掲。

いる。それが，1990年を境に，年々増加傾向にあり，1996年にはそれまでの最多の7人を数えた。夫の職業は，ダイビングサービスや民宿など観光産業である者が，全体の2/3にあたる26人を数える。次いで，公務員が6人であり，それ以外は7人にすぎない。

次に，ヤマト嫁の中でも座間味村での定着性が高いと考えられる，夫が座間味村出身者または夫が観光事業所経営者である31人に対して，彼女たちの属性や結婚プロセスについてアンケート調査をした。

ヤマト嫁の出身地は東京都の8人を最多とし，以下，兵庫県と埼玉県が3人，大阪府，神奈川県，愛知県，千葉県が2人と続いている。また，地

方出身者の中には，大都市圏で進学・就職をした後に座間味村で結婚している人もおり，有効回答27人中25人までが，座間味村に嫁ぐ以前の居住地は三大都市圏である。

また，座間味村に嫁ぐことを決意した村に関する肯定的評価として，「座間味村の海がきれいだから。」（20人）と「座間味村の地元の人々が良いと思ったから。」（14人）をあげる人が多かった。つまり，座間味の自然環境や素朴で温かい村民たちに魅せられて，村での結婚を決意していったことが伺える。

ヤマト嫁たちが座間味村を初めて訪れたのは，平均23.6歳であり，その目的は「ダイビングをするため。」（13人），「ダイビング以外の旅行。」（８人），「ヘルパーやインストラクターをやるため。」（５人）であり，この３目的でほとんどを占める。

彼女たちの結婚時の平均年齢は26.8歳なので，初めて村を訪れてから平均3.2年後に結婚をしていることになる。その間，村内でヘルパーやインストラクターなど観光産業に従事した経験がある者は16人を数える。また，彼女たちの中には，座間味村に来る以前に保母や看護婦，教員など安定した仕事を退職して村に嫁いでいる者も多い。そのため，結婚行為の意志決定には大きな決断と覚悟があったものと推測される。

前章で，ヤマト嫁を，1980年代に座間味村を嫁いだグループと，1990年代に嫁いだグループに分けた。以後，前者を1980年代グループ，後者を1990年代グループと称する。アンケートの有効回答数27人のうち，1980年代グループは11人，1990年代グループは16人である。1980年代グループは，アンケートを実施した1997年現在で，村での結婚生活年数が８～17年に達しているのに対し，1990年代グループのそれは，０～７年と短い。

1990年をグループ分類の基準とする妥当性であるが，第１に，第１図からも明らかなとおり，ヤマト嫁の結婚年は，1990年を遷移点として，以後急増していることである。第２として，1980年代グループは全員，第１子が小学校の就学年齢に達しているのに対して，1990年代グループは，第１子が就学前であるか子供がいない段階である，という明確な違いがある。

これらの点から，1990年を分類の基準とするのは妥当と判断した。

Ⅲ　ヤマト嫁の生活環境評価

（1）日常生活上の評価

まず，座間味村のヤマト嫁たちが，村で日常生活を送る上での問題点をアンケートで尋ねた[6]。その結果，無回答者の1人を除けば，26人全員が何らかに関して村での生活上の問題点を指摘した。

第2表によると，日常生活で最も大きな問題点は，「病気になった場合に医療機関が充実していないこと。」で，23人（選択率88%）があげている。この場合，病気になるのは自分自身だけではなく，自分の子供[7]や義父母なども意識していると考えられる。村には座間味集落と阿嘉集落に県立那覇病院附属の診療所があり，住民医療に大きな役割を果たしているが，診療科目が限られていること，重病患者に対応できる環境にないこと，などから医療環境への不安は強い。

次いで，「島なので那覇までの交通アクセスが不便で，交通費が高いこと。」（19人）と，「台風などでよく船が欠航になり，行動が制約される

第2表　村での日常生活上の問題点

（回答数　26人）

順位	日常生活上の問題点	人数
1	病気になった場合に医療機関が充実していないこと。	23人
2	島なので那覇までの交通アクセスが不便で、交通費が高いこと。	19人
3	台風などでよく船が欠航になり、行動が制約されること。	15人
4	商店や美容院などが少なく、買い物やサービスが不便・不自由なこと。	13人
5	保育所や託児所が少なく、共働きが出来にくいこと。	13人
6	行事が多く、その準備や対応に追われること。	10人
7	島では人間関係が濃密で、都市のような気楽さがないこと。	8人
8	映画館や喫茶店など生活をより楽しめる都市的娯楽施設が少ないこと。	5人

アンケート調査より作成。

こと。」（15人）の交通の不便さに関する問題点の指摘が続く。

「医療機関が充実していない」や「交通が不便である」というのは，全国の島嶼で一般的に指摘されていることで，これらは沖縄では「離島苦（シマチャビ）」という。県内の他の島嶼市町村と比較して，座間味村は沖縄本島から近距離で，那覇市までフェリー，高速艇，航空機など各種交通機関が充実している。しかし，それでも座間味村は島特有のこれらの問題から避けられないのである。

この他，「商店や美容院などが少なく，買い物やサービスが不便・不自由なこと。」と，「保育所や託児所が少なく，共働きが出来にくいこと。」がともに13人であった。

前者については，座間味村のヤマト嫁は，三大都市圏から村に転入した比率が9割を越えており，村で享受できるサービスの質・量的貧困さが，彼女たちの不満につながったと考えられる。

特に，村に商店は21店立地するが（1994年7月現在）[8]，いずれも零細経営であり，鮮度，品揃え，価格ともに消費者であるヤマト嫁には満足できない状況である。そのため，日常の買い物先をアンケートで尋ねると，第1位は「生活協同組合のグループ購買」（17人）であり，第2位の「村内のスーパー・売店」（10人）を大きく引き離している。しかし，生協のグループ購買にしても，船が欠航した場合は商品が届かないことや，注文してから約2週間後にならないと商品が手に入らないことなど問題点が多い。このほか，「島の売店などは物価が高く，ほとんど生協であるが，島の付き合いもあるので，大変である。」というアンケートの自由記述にみられるように，島の人間関係を気にしながら買い物をしなければならない不満もある。村では購入ができない買回品や嗜好品については，アンケートによると，月に1度程度は那覇市に出向いて，購入をしている[9]。

後者に関しては，ヤマト嫁の多くは，ダイビングサービスや民宿の経営に関わりながら，乳幼児を育てている。アンケート調査時点で，就学以前の乳幼児を抱えるヤマト嫁は，27人中15人と過半数を越える。ところで，村には村立の幼稚園があるが，保育所や託児所はない。そのため，3歳未

満の乳幼児は個人的に預かってもらわなければならず，保育施設の不足は，共働き志向のヤマト嫁には深刻な問題である。

日常生活上の問題点の6位以下は，「行事が多く，その準備や対応に追われること。」（10人）や，「島では人間関係が濃密で，都市のような気楽さがないこと。」（8人）のような，座間味村の習慣や雰囲気に関することが続く。ただし，これらの項目を選択する人は過半数にも満たず，深刻な問題点とはいえない。

ところで，「病気になった場合に……」から「商店や美容院などが少なく，……」までの上位4つの問題点に共通することは，先述した生活環境の4つの側面の中でも，利便性の欠如に関することである。利便性は，地理学では近接性（accessibility）という概念で研究されてきた（関根，1993）。つまり，座間味村は医療機関や交通，商業・サービスへの近接性が低いのである。座間味村における日常生活環境の最大の問題点は，この近接性の低さに収斂されるといえよう。

次に，座間味村での日常生活は，結婚前の予想と比較して大変と感じているかどうかをアンケートで尋ねた[10]。

その結果を第3表に示す。これによると，回答者25人のうち，「予想どおり大変である。」が12人で最多であった。これに次いで，「予想どおり、あるいは予想以上に生活しやすい。」という回答も10人と多く，「予想以上に大変である。」と答えたのは2人と少なかった。島での生活が以外と楽であるという回答が多いことは，注目に値する。これは，彼女たちが座間味村に嫁ぐ段階で，島に住むことの大変さを覚悟して結婚していることと，座間味村は島嶼村ではあるが，県外出身者にも比較的生活しやすい地域であることが考えられる。

結婚生活年数の長短により，このアンケート項目の結果に違いがでてくるのか，1990年を基準として2つのグループに分けて集計した。第3表によると，1980年代グループは，「予想どおり大変である。」が最多の6人と多く，「予想以上に大変である。」と「予想どおり，あるいは予想以上に生活しやすい。」が各2人であった。これに対して，結婚生活年数の短

第３表　座間味村での日常生活の実感

（単位：人）

	1980年代グループ	1990年代グループ	合　計
予想以上に大変である。	2	1	3
予想どおり大変である。	6	6	１２
予想どおり（予想以上に）生活しやすい。	2	8	１０
合　　計	１０	１５	２５

アンケート調査より作成。

い1990年代グループでは，最も多かった回答が「予想どおり，あるいは予想以上に生活しやすい。」の８人で，「予想どおり大変である。」が６人，「予想以上に大変である。」は１人にすぎない。

両グループ間で村での生活の大変さに違いがない，とする帰無仮説 H_0 を検定すると，P 値は0.04となり，仮説は棄却された。すなわち，結婚生活年数が短い1990年代グループは，結婚前の予想より村での生活は大変だとは思っていない傾向が強いことが確認された。

このように２つのグループ間で差が現れた理由として，時代効果と結婚年数効果が考えられる。

時代効果とは，それぞれのヤマト嫁が結婚した時代が，彼女たちの生活環境への評価に与える影響である。この場合，結婚した時代により生活環境が異なるため，両グループの評価にも差が出たのである。すなわち，村の社会資本が年々整備されたことにより，1990年代グループが結婚した1990年代の村の生活環境は，1980年代グループが結婚した頃のそれと比較して，格段に生活しやすい環境になっている[11]。また，村は観光化の進展とともに，日本本土からの観光客や転入者が多くみられるようになり，日本本土と生活スタイルや雰囲気が似てきた。そのため，1990年代グループの方が，結婚・転入後の違和感を余り感じずにすんだのである。

結婚年数効果とは，結婚後の村での生活の長短の違いが，生活環境の評

価に与える影響である[12]。すなわち，村での生活が長くなると，いろいろな出来事を体験し，それがこの場合，マイナスの評価に結びつくのである。村での生活に関して思うところをアンケートに自由に記入させると，1980年代グループでは，「結婚当初は何も感じなかったことが，子供が産まれ成長していく中で沢山増えてきた（病院など）。また，自分の両親も年をとってきて，実家に帰る遠さをすごく感じている。」という記述があった。これに代表されるように，結婚生活が長くなると，子供のこと，親のことなどで結婚当初に感じなかった村の生活環境の問題点が，改めて再認識されてくるのである。

この項目の結果に対し，結婚前に座間味村の観光事業所でヘルパーやダイビングインストラクターを経験した人は，村の状況をある程度把握しているので，結婚後に生活環境の不満は少ないのではないか，という仮説がたてられる。そこで，結婚前に村の観光事業所で働いた経験があるグループと，それらを経験していないグループに分けて，両グループ間で結婚後の生活環境評価に差はあるのか検定をしてみた。その結果，P値は0.13となり，結婚前に村の観光事業所で働いていたかどうかは，評価には影響していないことがわかった。

（2）子供の教育環境に関する評価

ところで，前節は，村の日常生活に関する問題点についてであるが，次にヤマト嫁にとって最も関心が高いと思われる，子供の教育環境について言及したい。

アンケート結果によると[13]，子供の教育について「不安がある。」と回答した人は，25人中20人にのぼった（第4表）。これを，就学児童・生徒を家族に持つ1980年代グループと，子供がいないか，就学前の乳幼児が中心となる1990年代グループに分けて，両グループ間で教育に対する不安の有無に差があるのかを検定した。その結果、P値は0.21となり、帰無仮説H_0は採用され，両グループには有意な差は認められなかった。また，子供がいない3人を除いて，同様に両グループ間に差があるかを検定した結

第４表　子供の教育への不安

（単位：人）

	1980年代グループ	1990年代グループ	合　計
不安がある。	１０	１０	２０
不安はない。	１	４	５
合　　計	１１	１４	２５

アンケート調査より作成。

果，P値は0.25となり，帰無仮説H_0は採用され，やはり両グループには有意な差は認められなかった。

これは，子供の有無や子供の年齢層に関係なく，ヤマト嫁たちは村での教育に不安を感じていることを示している。子供の教育に関しては，結婚年数効果はほとんど効いていないのである。

さらに，具体的に教育上どのような不安があるのかを尋ねた[10]。その結果は，「小・中学校で１クラス当たりの人数が少なく，互いに切磋琢磨しあえる環境ではないから。」が18人中13人，「子供の学力が付きにくい環境だと思われるから。」が７人であった。特に，前者については，就学児童・生徒を抱える1980年代グループで，11人中10人までがこの理由をあげた。

座間味村の小・中学校は全て併設校であり，各島に１校ずつ計３校が立地している。最大の座間味小・中学校でも児童・生徒数は計57人である（1998年６月現在）。少人数教育は教師と児童・生徒のコミュニケーションが充分とれ，学習効果が上がるなど良い面も多い。しかし，アンケートの自由記入欄には，「（子供の）いろんな可能性を伸ばせる場所がない。」「運動面でも人数が少ないため活動が限られ，自由に選べない。」などに代表されるように，否定的な記述も多かった。

また，「学力が付きにくい。」，あるいは「（沖縄）本島，内地等よりの学力の遅れ。」などの心配や不安も根強い。聞き取りによると，村には

学習塾が存在しないこと，また，小・中学校の教員は頻繁に人事異動があり，腰を据えた教育指導がなされにくいこと，などが指摘された。

三大都市圏出身のヤマト嫁自身は，大都市での能力主義的・競争主義的な生き方を否定し，自然環境や人の良さに魅せられて座間味村に嫁いでいる（宮内，1998）。しかし，自分の子供については，高校進学時に離島しなければならないこと，就職は島ではなく，沖縄本島や日本本土で行うことを予想し，それに対応できるような学力や能力を付けさせたい，とほとんどのヤマト嫁は考えている。一般的に，旧住民の母親より，ヤマト嫁の方が教育熱心であるといえよう。

（3）村内における人間関係の評価

ヤマト嫁の村内における人間関係の結びつきをみるために，日頃，誰と仲良く付き合っているのかを尋ねた[15]。その結果，回答数26人中，「地元（座間味村）出身，県外出身の人が半々くらいである。」と答えた人が15人と最も多かった（第5表）。次いで，「主に自分と同じような県外出身の人である。」と答えた人が9人で，「主に地元出身の人である。」と答えた人は2人であった。

地元出身者と主に付き合っている人は2人と少ないが，地元出身，県外出身が半々であるという人を加えると，約65%程度のヤマト嫁が，地元の

第5表　ヤマト嫁の交友相手

（単位：人）

	1980年代グループ	1990年代グループ	合　計
主に自分と同じような県外出身の人である。	3	6	9
地元（座間味村）出身、県外出身の人が半々くらいである。	6	9	15
主に地元出身の人である。	2	0	2
合　　計	11	15	26

アンケート調査より作成。

人々と良好な交友関係を築いていることになる。これは，彼女たちの多くが，村内でヤマト嫁だけの閉鎖的な人間関係の中で日常生活を送っているのではなく，旧住民を中心に構成される地域社会にも溶け込んでいることを示している。

座間味村のヤマト嫁たちが，旧住民とも良好な人間関係を形成しているのは，座間味村の旧住民が彼女たちに対して比較的開放的に接してくれるため，ということが第1要因である[16]。このほか，座間味島では集落内の住宅不足を解消するために，阿真地区に村営アパートが建設され，そこで旧住民たちの世帯やヤマト嫁を含む世帯などが混住するようになったことも，両者が日常的に接して交流する機会を提供したと考えられる。

これを，1980年代グループと，1990年代グループに分けて集計してみた。両グループともに「地元出身者，県外出身者が半々である。」と答えた人が最多であった。しかし，前者では「主に地元出身の人である。」と答えた人が2人いるのに対し，後者のそれは0人で，「主に自分と同じような県外出身の人である。」と答えた人が6人と多かった。

誰と主に付き合っているのかについて，両グループ間に差があるのかどうかを検定した。その結果，$P=0.05$ となり，両グループ間による差異はない，という帰無仮説 H_0 は棄却され，統計的有意差が認められた。すなわち，ヤマト嫁は結婚後，村の状況がよくわからないため，まず，自分と同じ県外出身者と交友関係を構築する傾向がみられる。しかし，村での生活年数がたつにつれて，旧住民たちとも交わる程度が深まっていくことが明らかになった。1980年代グループに地元出身者との結びつきが強まるのは，結婚年数効果以外に，このグループは全員が小学生以上の子供を有しており，学校を通してのコミュニケーションネットワークが広がっていったことも要因と考えられる。

次に，地域社会の構成員の多くを占める旧住民たちから，自分が受け入れられていると感じているかどうかの，受容感について尋ねた[17]。その結果，回答数25人のうち，「充分受け入れられていると感じることができる。」と答えた人が11人，「受け入れられていると感じているが，時々感じられ

ない時もある。」が14人，「あまり感じることができない。」は0人であった（第6表A）。旧住民に受け入れられていない，という否定的な回答が皆無であったので，ヤマト嫁は程度の差はあるが，ある一定の受容感を全員が持っていることが判明した。ただし，全員が全面的に旧住民に受け入れられていると感じているわけではなく，「時々感じられない時もある。」が最多回答であることから，ヤマト嫁の多くは，やはり自分はよそ者であるという意識が，少なからず付きまとっていることも明らかになった[18]。

結婚年数の長短により受容感にも違いが出てくるのか，1980年代グループと1990年代グループに分けて有意差があるか検定した[19]。その結果，P値は0.546となり，両グループ間で受容感に違いがない，という帰無仮説

第6表　旧住民からの受容感

A　　（単位：人）

	1980年代グループ	1990年代グループ	合　計
充分受け入れられていると感じることができる。	4	7	11
受け入れられていると感じているが、時々感じられない時もある。	6	8	14
あまり感じることができない。	0	0	0
合　　計	10	15	25

B　　（単位：人）

	結婚時に旧住民を肯定的に評価したグループ	結婚時に旧住民を評価していなかったグループ	合　計
充分受け入れられていると感じることができる。	8	2	10
受け入れられていると感じているが、時々感じられない時もある。	6	8	14
あまり感じることができない。	0	0	0
合　　計	14	10	24

アンケート調査より作成。

H_0は採用された。すなわち，自分が旧住民に受け入れられていると感じることができるかは，座間味村での結婚生活の長短とは関係が無いことが明らかになった。

そこで，受容感が強いのは，どういう属性のヤマト嫁のグループなのかを解明するために，結婚時の座間味村民に対する肯定的評価が結婚後にも影響している，という仮説をたてた。結婚時に座間味村の評価として，「座間味村の地元の人が良い人たちだと思ったから。」と答えたヤマト嫁14人と，そのことをあげなかった10人にグループ分けをした[20]。結婚時に座間味村の人を良い人たちだと感じたグループは，結婚後も旧住民たちに充分受け入れられている，と感じている人が過半数以上を占める。しかし，結婚時に旧住民のことを評価していないグループでは，時々受け入れられていない，と感じる人が8人と多い（第6表B）。

結婚時に旧住民に対する評価の異なる両グループ間で，結婚後の受容感の違いに差があるのか検定した。その結果，P値は0.08で帰無仮説H_0は採用され，有意な差は認められなかった。しかし，P値は偏りの容認確率0.05に近似なため，統計学的には有為な差はなくても，結婚を決意する時に，旧住民を肯定的に評価したグループは，結婚後も旧住民に受け入れられている感覚が強いのに対し，そうでない者は（その多くは，村の自然環境のよさのみを評価している），結婚後の受容感は低くなるという傾向は認められる。

ただし，前者においても，時々受け入れられていないと感じる者が6人いるのは，結婚時に旧住民の人間的良さを評価しても，結婚後に旧住民から時々受け入れられないと感じてしまう個人的体験があったからと考えられる。個々人がどのような結婚生活上の体験から，旧住民から時々受け入れられていないと感じるようになったのか，それについては今回のアンケートでは調査しなかった。

以上のことから，ヤマト嫁が旧住民から受け入れられていると感じる強弱には，結婚年数効果は認められず，結婚時の旧住民に対する評価が弱いながらも影響していることが確認できた。

Ⅳ　おわりに

本稿では，ヤマト嫁と呼ばれる座間味村に嫁いだ県外出身女性に焦点をあて，彼女らの村での生活環境に対する評価について，日常生活や子供の教育環境，旧住民との人間関係に関するアンケート結果から記述・分析した。その際，ヤマト嫁の結婚生活年数の長短によって，それらの評価に違いがでるのかどうかを，統計学的に検定をした。その結果，次のことが明らかになった。

①ヤマト嫁が座間味村で日常生活を送る上での問題点は，医療環境への不安，交通の不便さへの不満，商業・サービス機能の弱さが上位を占めた。これらは，沖縄では「離島苦（シマチャビ）」といわれるが，地理学的には近接性（accessibility）の低さに起因する問題といえよう。

②村での日常生活は，結婚前の予想と比較して大変と感じているかどうかを質問した。結果は，「予想以上に大変である。」と答えた者が２人と少なかった。これを，1980年代グループと1990年代グループに分けて分析すると，前者の方に「予想以上に生活しやすい。」と感じている傾向が強いことがわかった。これは，時代効果と結婚年数効果の２つが影響していると考えられる。

③子供の教育については，約８割のヤマト嫁が不安を感じている。特に，島嶼特有の少人数教育に対する不安が最も強い。この問題については，結婚年数効果は影響していない。

④村内において，誰と仲良く付き合っているか質問することで，ヤマト嫁の人間関係を分析した。その結果，結婚年数が短い者は，自分と同じ県外出身者と交友関係を結んでいるが，それが長くなるにつれて，座間味村の旧住民との交流が深まっていく傾向が認められた。

⑤旧住民が自分を受け入れていると感じられるかどうか，受容感について尋ねたところ，全員が一定の受容感を持っていることが判明した。受容感の強弱の違いには，結婚年数効果は認められない。また，彼女たちが，結婚時に旧住民を肯定的に評価したかどうかが，結婚後の受容感の強弱に

若干の影響を与えていることが明らかになった。

村の生活環境に対してヤマト嫁が指摘した問題点は，多々あるものの，アンケート調査と並行して実施した聞き取りでは，ほとんど全員のヤマト嫁は，座間味村に嫁いだことそのものに対する後悔はない。

今回のアンケートの自由記入欄にも，「離島での生活について，よく決心したねという言葉をよくお聞きしますが，特別何か不安があったりとか，物不足という事もなく，気軽に毎日過ごしております。」「もう都会には帰りたくない。島での生活が楽しい。」「自然環境に恵まれ島の人々もあたたかく，住んで心地よいと思える。」など，村での結婚生活の満足感は高いと言えよう。そして，「子供は将来島を出てゆくかもしれないが，私はここに住もうと考えています。」という永住志向が強く，さらに「方言や行事等，まだまだわからないことが多いのですが，少しでも覚えて子供達に伝えていきたいと思っています。」「地域の自然も大切にしてゆきたいし，していただきたいです。」というように，村の自然や文化，伝統などを次世代に残したいという前向きな姿勢も伺えた。

村での生活環境や人間関係には多少の問題点は感じているものの，ほとんどのヤマト嫁には，「私はこの島が大好きである。この自然を，離島という不便さが好きである。」と書かれた村への想いは，ほぼ一致するところであろう。

本稿では，ヤマト嫁の立場から日常生活環境の評価や旧住民との人間関係の評価を調査した。ただし，後者の旧住民との人間関係の評価については，残念ながら充分検討はできなかった。今後は，座間味村の旧住民たちが，観光化が進展する自分たちの村をどのように評価しているのか，また，ヤマト嫁に代表される県外出身者たちをどのようにみているのか，について検討することが必要であろう。

本研究にあたり，快くアンケートや聞き取りにご協力いただいた，座間味村のヤマト嫁の皆様方には深く感謝します。また，日頃からご指導いただいている琉球大学法文学部地理学教室の先生方には厚くお礼申し上げま

す。本稿の骨子は，1997年度人文地理学会大会（於，大阪市立大）において発表しました。

注

1）移動型県外出身者とは，主に民宿やダイビングサービスなど座間味村内の観光事業所に従業員として勤務している者を指し，彼らは一般的に村での定着性は低い。また，定住型県外出身者とは，将来にわたって座間味村で生活をすると考えられるグループである。具体的には，ダイビングサービスの経営者とその妻，座間味村出身者のもとに嫁いだ女性が相当する。1996年8月現在で，座間味村には前者は132人，後者は52人である（宮内，1998）。

2）1996年8月現在で，定住型県外出身者52人のうち，ヤマト嫁は38人であった。

3）生活環境の客観的評価に関する研究として，盛岡市において生活関連施設への近接性を測定した関根（1992）がある。また，主観的・認識論的な研究として，都市近郊の山形市蔵王地区で，住民の居住地選好と居住地の評価（満足度）の関係を解明した浜谷（1983）や，盛岡市北部で生活関連施設に対し，生活の中での満足度を調査し，その規定要因を考察した関根（1994）がある。

4）ただし，$fi\bullet$ や $f\bullet j$ は，式をすっきりさせるために用いたドット表示方式であり，前者は $\sum_{j=1}^{m} f_{ij}$，後者は $\sum_{i=1}^{l} f_{ij}$ をそれぞれ表わす。

5）この式の左辺における縦線の右側の2つの記号は，この確率関数におけるパラメーターを示す。

6）質問仕様は次のようなものである。「座間味村に住んでみて，日常生活上どのような点で不便を感じていますか（複数○可）。」選択肢の内容は第2表を参照のこと。

7）ヤマト嫁は結婚年数が比較的短いため，病気になりやすい乳幼児を抱

えている者が多い。

8）沖縄県統計課編『沖縄県の商業』による。

9）アンケートによると，那覇市へ行く頻度は，月1回と回答した人が28人中17人と最も多い（次いで，年5～6回が5人，年3～4回が3人である）。また，那覇市へ行く目的は，買い物が25人中19人，病院への通院が8人，銀行が5人であった。

10）質問仕様は次のようなものである。「座間味村で実際に生活をしてみて，結婚前に予想していた以上に島での生活は大変ですか。1.予想以上に大変である。2.予想どおり大変である。3.予想どおり，あるいは予想以上に生活しやすい。」（1.2.3.のうち1つ選択）

11）例えば，1990年代に入り，高速船が1日3往復就航したことや，飲食店の開業が相次いだこと，など。

12）村落地理学では，混住化された農村において，新旧住民間で近隣環境の知覚や評価が異なることが明らかにされている（例えば，浜谷，1983，浜谷，1986）。これらの現象は，居住年数効果によるとされる。ただし，座間味村のヤマト嫁は，結婚前からヘルパーなどで座間味村に居住しているため，結婚後の村の評価を解明しようとする本稿の目的には，居住年数効果という用語はそぐわない。そこで本稿では，結婚年数効果という用語を用いる。

13）質問仕様は次のようなものである。「子供の教育に不安がありませんか。1.不安がある。2.不安がない。」（1.2.のうち1つ選択）

14）質問仕様は次のようなものである。「子供の教育に不安がある，と回答された方は，どのような不安ですか。1.小・中学校で1クラス当たりの人数が少なく，互いに切磋琢磨しあえる環境ではないから。2.子供の学力が付きにくい環境だと思われるから。3.その他。」（1.2.3.のうち1つ選択）

15）質問仕様は次のようなものである。「日頃，家族以外で仲良く付き合っている（話をよくするなど）のは，どのような人たちですか。1.主に自分と同じような県外出身の人である。2.地元（座間味村）出身，県

外出身の人が半々くらいである。3.主に地元出身の人である。」（1.2.3.のうち1つ選択）

16）多くのヤマト嫁からの証言による。アンケートの自由記入欄には，「島の方々はとても良くして下さいますし，座間味は住みやすい島だと思いますよ。」とか「座間味は県外出身者も多いので，地元の人も県外の人に慣れていると思う。」という記述があった。

17）質問仕様は次のようなものである。「他県出身者である自分は，地元（座間味村）の人たちに受け入れられていると感じることが出来ますか。1.充分受け入れられていると感じることができる。2.受け入れられていると感じているが，時々感じられない時もある。3.あまり感じることができない。」（1.2.3.のうち1つ選択）

18）このほか，「自分の方に完全には入っていけない気持ちがあるかも。」という自由記述にみられるように，ヤマト嫁自身の心のためらいが，受容感の弱さに結びついていることも考えられる。

19）「あまり感じることができない。」が0人なので，それは検定から除外した。

20）筆者は前稿（1998）で，ヤマト嫁が村に嫁ぐ時に，座間味村のどのようなところが良い点だと思ったのかアンケート調査（複数回答）した。その結果，自然環境の良さをあげた者に次いで，「座間味村の地元の人が良い人だと思ったから。」が24人中14人であった。

文　献

奥野隆史（1977）：『計量地理学の基礎』，大明堂，357p.

関根智子（1992）：近接性からみた盛岡市における生活環境の分析．地理学評論，65A，441～459.

関根智子（1993）：生活の質と生活環境に関する地理学的研究－その成果と展望－．経済地理学年報，39，221～238.

関根智子（1994）：住民による生活環境評価の空間分布とその規定要因－盛岡を事例として－．地理誌叢，36(1)，1～8.

浜谷正人（1983）：都市近郊における居住地選好の空間構造．山形大学紀要（社会科学），13，145～181.

浜谷正人（1986）：都市近郊における環境知覚と住民属性－いわゆる居住年数効果を中心として－．水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』，大明堂，751～759.

宮内久光（1998）：人口増加島嶼地域・沖縄県座間味村における県外出身者の存在形態．地理科学，53，283～296.